

特別支援教育における一人ひとりにあった指導のあり方

～文字の指導を通して～

根上町立浜小学校 西田悦子

1、主題、副題設定理由

平成11年度より、在籍者が一人でも特殊学級を設置できるようになり、初めて特殊学級を担当する教師が増えてきた。(石川県の特殊学級設置率は、61.5% 平成15年度)私自身もその中の一人であり、一昨年度初めて特殊学級の担任となった。

初めは何をして良いのか分からず、以前からの活動をそのまま続けていたというのが実状であった。二年間担任してみて、子どもと向き合い子どもに合わせた指導が可能な場所であることは十分に理解できた。しかし、教科の学習に行き詰まり、同じことの繰り返しで、自分が担任してから子どもに成長は見られたのか・何をどう指導したらよいかと悩んだ。

「一人ひとりにあった指導」とは、発達段階や障害・その子の良さ・個性・性格などを考慮する事が大切であり、子のニーズにあった指導である。もし文字の指導が可能な子どもならば、文字が分かることによって必要な情報が得られ、人と関わりを持ち、自分の世界を広げられる。生活を豊かにし、自立と社会参加につながる、その子にあった文字の指導のあり方を探り、実践したいと考えた。

2、研修の目的

知的障害のある子どもの適確な実態把握に基づき、その教育的ニーズに応じた個別の指導計画を活用した指導のあり方(何をどう指導するか)を探る。

3、研修の方法

具体的な指導のあり方を探るために、二人の知的障害のある子どもを対象に実践を行なう。発達検査について研修し演習する。個別の指導計画の作成について研修し、担任と一緒に立て、その計画に基づき実践授業を行い、実践結果を検証し考察する。

実践例より

対象児Aは小学校1年の男子。自分の名前が分かり始めた。NCプログラムでは、上限と下限の差が3歳ほど離れているZタイプであった。文字

に興味を持ち、他の文字の弁別ができる事をねらって実践を行なった。週に1時間の指導で計13回行なった。運筆練習と指先の練習を行ないながら、分類・弁別学習 線分による学習 図形の弁別学習 図形の構成 文字(ひらがな)の弁別の指導順に、担任の協力を得ながら指導した結果、「ま」の字が書けるようになった。

その理由としては、学習に集中できる時間が長くなった事、良く見る力を持っていた事、好きなもので学習できた事、毎日の繰り返し学習があった事、指導計画が有効だった事が考えられる。今後はこの指導段階を他の文字に置き換え、理解できる文字を増やせるのではないかと考える。

運筆練習に関しては、まだ不十分なので、今後、運動機能の発達面の指導についても考えていかなければならない。

4、研修のまとめ

三ヶ月という短期間ではあったが、担任の協力で子どもの確かな変容が見られ、実践授業を通して“一つの指導のあり方”を探る事が出来た。以下、本研修で得た事をまとめる。

- 「何を教えるか」を決めるにあたって
的確な実態把握をする。
子ども・保護者のニーズにあった個別の指導計画を立てる。
長期・短期の目標を立て、そのための具体的な指導のステップを考える。子どもの好きなもの・興味のあるものを題材にする。
指導の評価を行い、次回の指導に役立てる。
- 「どのように指導するか」について
子どもとの関係を大切にする。意志の伝達方法や子どもの理解できる指示の仕方を知る。活動の見通しを分かり易くする。終わりには、好きな活動や楽しみな事があると良い。出来る事と出来そうな事を取り入れる。毎日の繰り返し学習が重要である。決まった時間の組み方をし、なるべく変更はしない。
授業の記録をとり、観点を持って指導の評価を行い、次回の学習へつなげる。